いへども、牡丹のはなにてハなし、牛の異名也、昔唐土の劉訓と云し人、繫水牛在前、指曰、此劉訓が黑牡丹也と、それよりして牛の異名なりとす、

第三一重に四品あり、一重、八重、千重、万重也、此内八重千重を上とすべし、一重ハたらず、万重ハおほし、又盛上て芍藥咲矢倉咲といふハ、藥の中より細き葩出る、皆下品也、凡葩五葩より十五六に及迄を一重とし、廿葩より廿四五葩に及ぶを八重とし、それより次第におほく、百葩近きまでを千重とし、百葩以上あらバ万重と知べし、

重おほきはなハ、木によつて綻る時、内へ雨入て藥くさる事有、雨入ざる樣にすべし、自然雨入たらバ、よく其雫を落べし、吹拂てもよし、

第四一實ハ紅にハ赤き實よし、白にハ赤ろきよし、いづれも小瓶子なりを上とす、白牡丹に青き實有、是も赤く黑くうるみたるよりハよし、紫陽より出し花に、袖の内といへる白ハ實眞黑也、されども花色花形よきによりて上品とす、たとへバ松の葉北斗紅ハ實裂る也、裂るハ實の第一疵なれども、花の色能によつて上品とせり、九品相揃ふ事なきにより、一ッ二ッの難ハゆるす、餘ハ是になぞらへて知べし、實ハ小く破れざるをよしとす、大にして破るを嫌ふ、〇略下

〔閑窓自語〕本朝愛牡丹事

わが國にぼたんを愛せしこと、保元以前よりはじまれるなり、〇略中靈元院法皇ことにめでおはしましけるよし、たしかに云るせり、

〔玄同放言二〕山牡丹附山橘出

本邦にても、近世牡丹を鍾愛すること盛になりしかば、種々の異名さへ負はして、吟味せざるものなかりき、されば寶永の比に至りて、この花を弄ぶこと、異朝唐宋の時に讓らず、當時春桃散人といふもの、牡丹論談一卷を著はしたり、こは寶永八年二月上旬の事なり、撰者の自序に云、春の